

科学研究費助成事業 基盤研究 (B)
(2018 年度-2020 年度 研究課題/領域番号 18H00686)

「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した
CEFR 能力記述方法の開発研究」の概要と活動実績 (2018-2020) ¹

**Summary and Activities of the Research Project:
“Research and Development of CEFR Proficiency Description Methods
with special consideration for linguistic types and socio-cultural diversity
of Asian Languages : 2018 – 2020”**

研究代表者 富盛 伸夫
Nobuo Tomimori (Project Leader)

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies (3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan)

1. 本研究プロジェクトの研究課題と問題設定

ヨーロッパ連合 (以下、EU) 統合の象徴の一つであり言語教育改革の基盤をなす「ヨーロッパ言語共通参照枠組み」(Common European Framework of Reference for Language、以下 CEFR ; 刊行物は本稿では *CEFR2001* と呼ぶことにする²) は、2001 年に公開されてから約 20 年を経ようとする現在、その理念 (行動中心複言語主義、コミュニケーションタスクと解決能力の育成、通言語的到達度評価方法など) と実践面の実績は急速に世界各国に拡大しつつあり、言語教育の現場そのものを変容させている。本研究の目的は、日本語を含めた非 EU 諸語、特にアジア諸語への CEFR の適用可能性の検証が現時点で必要となっているという認識から、以下の 3 点に集約される。

- (1) EU で現在進行中の CEFR 改訂の動向をふまえ、国内外の研究者とも連携しつつ、CEFR の東南アジア諸語への適用に際して必要となる言語類型論的、社会・文化的特質を考慮した新たな言語能力記述方法を提案して日本および世界の言語教育分野に発信し、より柔軟な CEFR の適用可能性を拓げることに貢献すること。
- (2) 言語使用地域で言語学習者の複層的言語使用状況に配慮した言語コミュニケーション能力の新たな評価法と教育方法に向けて研究すること。
- (3) CEFR-J の実施を進める日本の言語教育政策および現代社会のニーズ、特に中等教育や生涯教育との接続も視野に入れ、日本における CEFR の受容の様態を検証し発信すること。

以上の研究目的に接近するため、我々は研究プロジェクト、科学研究費助成事業基盤研究 (B) 「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」(2018 年度-2020 年度、研究代表者富盛伸夫、研究課題/領域番号 18H00686) を組織し、特に、EU で 2018 年に発表された

¹ 本稿は本科研プロジェクトの中間報告 (2018-2019 年度) に 2020 年度の活動報告と総括を追補したものである。本科研の概要及び上記の中間報告書は、先行する富盛代表の科研情報とともに、東京外国語大学語学研究所の Web サイト内にリンクされている協働科研一覧から参照できる。(http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/Asia_CEFR/index.html)

² *CEFR2001* の本文は <https://rm.coe.int/1680459f97> を参照。(2021 年 3 月 15 日確認)

CEFR の追補版 Companion Volume with New Descriptors (以下、*CEFR CV2018*)³と 2020 年に発表された改訂版 (以下、*CEFR2020*)⁴の最新動向をふまえ、アジア諸国の研究者・教育者とも連携しつつ、日本および世界の言語教育分野に研究成果を還元し貢献することに努めてきた。

本研究グループに参加する科研分担者と研究協力者は本稿末尾の表を参照されたい。(上記のサイトから、参加者の氏名・所属・本科研課題に関わる研究分担分野のみを転載した。)

なお、研究の分野・範囲を示すキーワードを記すと以下のとおりである。(順不同)

(a) CEFR (b) アジア諸語 (c) 言語類型 (d) 社会・文化的適切性 (e) 言語能力評価法

2. 本研究の実施計画(3年間)および経過報告

I. 研究作業班：研究計画に対応した 3 つの作業班を組織し、分担者は専門研究領域において計画遂行に向けて協働する。以下は各作業班別に記した実施計画の概要と活動経過である。

A 班：EU の均質的な土壌に生まれ適応環境に制約のある CEFR を批判的に検討し、それとは異なる東南アジア諸語の言語的・社会的・文化的多様性を考慮した付記事項 (South Asian Supplements) 付きの能力記述項目を開発し、より適切に運用しうる柔軟な能力評価方法を提案する。

分担領域は、藤森弘子 (日本語)、南潤珍 (韓国語)、田原洋樹 (ベトナム語)、鈴木玲子 (ラオス語)、上田広美 (カンボジア語)、野元裕樹 (マレーシア語)、スニサー・ウィタヤーパンヤーン・齋藤 (タイ語)、岡野賢二 (ビルマ語)、降幡正志 (インドネシア語)、峰岸真琴 (東南アジア諸語の類型論)。

2018 年度はこの目的で、社会・文化的付記事項付きの能力記述項目を抽出し、東アジア諸語を含む言語ごとに CEFR の A1~C1 レベルに定義して EU の CEFR スケーリングと調整する。分担者は担当地域の国際連携研究機関・研究者と協働し、各地に特徴的な語用論的ストラテジー (売買などの交渉、依頼、断り、謝罪、提案など) や配慮表現など、東南アジア版能力評価記述項目に反映しうるような社会・文化的指標の抽出を行ってきた。

2019 年度は社会内関係が反映した待遇機能・談話構成や会話体・文章体の交替も研究対象として包括し、異文化間言語コミュニケーション能力 (適切な言語的対応能力) の記述方法の試案作成に向けた活動を展開してきた。

2020 年度には東アジア・東南アジア地域の各言語に適した能力評価記述項目 (descriptors) を組み込んだ CEFR のアジア諸語対応版を数言語において提案し問題点を精査した。

B 班：EU による CEFR 追補版 *CEFR CV2018* における複層的異文化間言語教育に関する動向の調査と 2020 年に発表され改訂版として位置付けられる *CEFR2020* における社会文化的仲介能力の重要性を確認しつつ、東南アジア言語圏の複層的言語使用を分析し言語学習者の複言語使用状況に配慮した言語コミュニケーション能力をスケーリングするための方法論的研究を行う。

担当領域は、根岸雅史 (CEFR 改訂調査)、富盛伸夫 (マレーシア・Kristang 語使用地域)、矢頭典枝 (社会言語学・アジアの英語変種)、拝田清 (アジア・太平洋地域の複言語使用研究)、

³ *CEFR CV2018* の本文は <https://rm.coe.int/cefr-companion-volume-with-new-descriptors-2018/1680787989> を参照。(2021 年 3 月 15 日確認)

⁴ *CEFR2020* の本文は <https://rm.coe.int/1680459f97> で参照できる。(2021 年 3 月 15 日確認)

科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 2018 年度-2020 年度 研究課題/領域番号 18H00686)「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」の概要と活動実績 (2018-2020) (研究代表者 富盛伸夫)

Summary and Activities of the Research Project:

“Research and Development of CEFR Proficiency Description Methods with special consideration for linguistic types and socio-cultural diversity of Asian Languages : 2018 – 2020” (Nobuo Tomimori: Project Leader)

峰岸真琴 (東南アジア諸語の言語動態・複言語使用研究)、野元裕樹 (マレーシアの複言語併用研究)、降幡正志 (インドネシアのスダ語使用地域)、荻原寛 (研究協力者: フィリピンの社会言語学的動態研究)、内藤理佳 (研究協力者: マカオ・ポルトガル語系話者の言語・文化・社会コミュニケーション研究)、アラエルディーン・スライマーン (研究協力者: アラビア語圏の社会・文化的特質研究)。

2018 年度は A 班のメンバーと協働しつつ各言語地域の複層的言語コミュニケーションの実際についてサンプリングをして社会・文化的視点からの動態的分析とモデリングを進めた。

2019 年度・2020 年度は東南アジア言語圏の動態的・複層的言語使用と言語学習者の複言語使用状況を考慮した言語コミュニケーション能力の分析と教材などの開発を試みた。

C 班: B 班の課題研究の視点を日本の複言語学習の再検証作業に応用し、中等教育・高等教育および社会的ニーズに対応した生涯教育における複数言語の能力到達度評価法の改善に向けて成果を発信する。

担当領域は、富盛 (総括および生涯教育)、根岸 (CEFR-J、中等教育英語教育)、拝田 (言語教育政策、英語教育法)、山崎吉朗 (研究協力者: 中等教育・生涯教育)。

2018 年度は国内の CEFR 研究グループや他の言語能力評価法の研究者との研究交流により、中等教育や生涯教育を含む一般社会にも妥当性の高い複言語能力到達度測定モデルを構築するための研究を進めた。

2019 年度・2020 年度は CEFR-J 研究者などと連携して日本の言語教育政策および中等教育や生涯教育との接続も視野に入れ、日本の言語教育に適用しうる複言語使用の能力記述方法の研究を行い、担当者が各自の領域で成果発信を行う計画を立てた。

研究統括班: 上記 3 つの研究作業班の円滑な課題遂行を把握・管理し、研究代表者富盛が班長として総括的責任を持つ。統括班メンバーは、峰岸真琴、岡野賢二、上田広美、南潤珍、スニサー・ウィタヤーパンヤーン・齋藤、拝田清であり、報告書の編集委員会や予算執行の管理などに関与する。

初年度より各班との協働によりアジア諸国および国内のアジア諸語研究者の協力を得て、言語・社会・文化的特質の付記事項抽出の作業を評価してきた。

EU で進行している CEFR 研究の最新動向と複層的社会・文化的コミュニケーション研究および異文化間言語教育に関する研究情報を把握しつつ、本科学研究による成果の有効性を検証するための企画調整を行っている。

これまでに全分担者による運営委員会を 3 回、統括班委員による統括班会議 (リモート会議・メール審議を含める) を随時開催し集団運営体制の尊重と意思疎通を図っている。研究に支障が出ないように東京外国語大学語学研究所の配慮により、研究拠点の確保などに適切な対応をすることができた。

II. 研究連携体制: 国内外の言語能力評価法研究分野の専門家との協力体制により講演会、シンポジウムへの参加を含む研究協力が得られている: インド・デリー大学、フィリピン・デラサール大学、マレーシア・マラヤ大学、南オーストラリア州教育省など。

東京外国語大学が参加する「アジア・アフリカ研究教育コンソーシアム」(CAAS) 加盟大学との研究協力体制は本研究でも活用している: シンガポール国立大学言語研究センター等。

国内では CEFR 研究グループ（東京外国語大学 CEFR-J など）、JLC 日本語スタンダード研究プロジェクト、立命館アジア太平洋大学、神田外語大学など、多くの他の科学研究費助成事業による研究グループと連携している。

3. 研究活動概要

3.1. 国際研究集会の開催

3.1.1. 国際ワークショップ：「言語教育（CEFR）国際ワークショップ」

2019（令和元年）年9月27日に本科研プロジェクトが主催し、東京外国語大学語学研究所の共催により開催された。本ワークショップは「言語教育（CEFR）国際ワークショップ：アジア・太平洋地域の言語教育」と題し、オーストラリアとマレーシアから言語教育、言語教育政策の専門家を招聘し、両国の最新の言語教育改革への取り組みとその相違点を知ることができた。CEFR の受容や反響は国や関係機関ごとに多様であり、地域ごとの教育史と実情にあわせたカスタマイズの努力が続けられていることが把握できた。

「言語教育（CEFR）国際ワークショップ：

アジア・太平洋地域の言語教育 -オーストラリアとマレーシアの現在-

«Language Education in Asia-Pacific Region: Current Issues of Australia and Malaysia»

日時：2019（令和元）年9月27日（金）17:30～20:20

会場：東京外国語大学 語学研究所（府中キャンパス研究講義棟4階419号室）

<タイムテーブル>

17:30-17:40 挨拶

「科研 (B) 「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」と、この国際ワークショップのめざすもの」

富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授：研究代表者）

17:40-18:20 講演 1

「オーストラリアの言語教育 -オーストラリアン・カリキュラムという文脈における諸政策、展望、そして多様性-

«Languages Education in Australia; policies, perspectives and diversity within the context of the Australian Curriculum»

Ms Antonella Macchia（南オーストラリア州教育省）

18:50-19:30 講演 2

「マレーシアにおける英語教育への CEFR 導入をめぐる議論について」

«Putting the CEFR into Malaysian English Language Education: The Debates Surrounding Its Implementation»

Prof. Dr. Stefanie Pillai（マラヤ大学教授）

19:50-20:20 総合討議

※講演言語：英語（通訳なし）

※共催：科学研究費助成事業基盤研究(B)「多様な英語への対応力を育成するウェブ教材を活用した教育手法の研究」（研究代表者：矢頭典枝 神田外語大学）、東京外国語大学語学研究所

科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 2018 年度-2020 年度 研究課題/領域番号 18H00686 「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」の概要と活動実績 (2018-2020) (研究代表者 富盛伸夫)

Summary and Activities of the Research Project:

“Research and Development of CEFR Proficiency Description Methods with special consideration for linguistic types and socio-cultural diversity of Asian Languages : 2018 – 2020” (Nobuo Tomimori: Project Leader)

3.1.2. 国際研究集会 (講演会)

2018 年 4 月から 2019 年 3 月の間に、上記の国際ワークショップを含め、インド、フィリピン、マレーシア、オーストラリアからの言語社会学、言語教育学の著名な専門家を講師に招いて 3 回の国際研究集会を開いた。特に、インド・デリー大学の Shobha Satyanaath 准教授とフィリピン言語学会前会長でもあり多言語状況の研究者でもある Shirley Dita デラサール大学准教授からは、多言語社会研究の視点から複言語教育の実際と問題点などを学ぶことができ、本研究の B 班に関わるフス層的使用状況における言語社会学・言語教育学上の知見を得ることができた。

国際研究集会 (講演会)

«Mapping English in India in Time and Space»

「インドの英語：時間と空間から捉える」

日時：2018 (平成 30) 年 7 月 6 日 18:00~19:30

会場：東京外国語大学語学研究所 (府中キャンパス研究講義棟 4 階 419 号室)

講演者：Shobha Satyanath (インド・デリー大学准教授 / 社会言語学)

※使用言語：英語 (一部日本語通訳付き)

※共催：東京外国語大学語学研究所

«Plurilingual Situation and Language Education in the Philippines»

「フィリピンにおける複数言語使用状況における言語教育」

日時：2019 (令和元) 年 7 月 12 日 18:30~19:15

会場：東京外国語大学 語学研究所 (研究講義棟 4 階 419 号室)

講演者：Shirley Dita (フィリピン・デラサール大学准教授、フィリピン言語学会前会長 / 社会言語学、危機言語研究)

※使用言語：英語

※共催：東京外国語大学語学研究所

共催講演会

«Philippine English and World Englishes»

「フィリピン英語と World Englishes」

日時：2019 (令和元) 年 7 月 16 日 14:50~16:20

神田外語大学 クリスタルホール

講演者：Shirley Dita (デラサール大学准教授、フィリピン言語学会前会長 / 社会言語学、危機言語研究)

※使用言語：英語

※主催：科学研究費助成事業 (基盤研究 B) 「多様な英語への対応力を育成するウェブ教材を活用した教育手法の研究」研究代表者：矢頭典枝 (神田外語大学)

3.2. 研究交流の場としての研究会の開催

本プロジェクトの日常的な活動として随時研究情報の交換や交流の場として語学研究所を拠点に研究会を開催した。2018 (平成 30) 年 6 月の第 1 回研究会から 2019 (令和元) 年 11 月までに、合計 8 回の研究会・研究集会を行っている。本科研による研究会・研究集会はいずれも東京外国語大学語学研究所の共催である。詳細は、本科研の Web サイトを参照されたい。

第1回研究会

日時：2018（平成30）年6月29日（金）18:00～19:30

会場：東京外国語大学語学研究所（府中キャンパス研究講義棟4階419号室）

「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮したCEFR能力記述方法の開発研究に向けて：
企画と展望」

富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）

※共催：東京外国語大学語学研究所

第2回研究会

日時：2018（平成30）年10月26日（水）18:00～20:15

会場：東京外国語大学語学研究所（府中キャンパス研究講義棟4階419号室）

1. 「世界の日本語教育最前線
ーヴェネツィア2018年日本語教育国際研究大会（VENEZIA ICJLE 2018）からー」
藤森弘子（東京外国語大学教授）
2. 「アジア諸語の社会・文化的ストラテジーに関わるCEFR調査指標の策定」
富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）
3. 「東外大生の専攻語選択に関わる要因の分析に向けて」
野元裕樹（東京外国語大学准教授）

※共催：東京外国語大学語学研究所

第3回研究会

日時：2018（平成30）年12月7日（水）18:00～20:00

会場：東京外国語大学語学研究所（府中キャンパス研究講義棟4階419号室）

1. 「タイ語での人称代名詞の使用実態とタイ語教育への活用 ータイでの現地調査資料からー」
スニサー・齋藤（東京外国語大学）
2. 「CEFR研究の最新動向とアジア諸語の社会・文化的特質に関わるCEFR項目の提案」
富盛伸夫（東京外国語大学名誉教授）
3. 総合討議（司会：富盛伸夫）

※共催：東京外国語大学語学研究所

第4回研究会

日時：2019（平成31）年1月25日（金）18:00～20:20

会場：東京外国語大学語学研究所（府中キャンパス研究講義棟4階419号室）

1. 「我が国の教育改革と外国語教育政策 ー英語以外の外国語教育への道程ー」
山崎吉朗（一般財団法人日本私学教育研究所）
2. 「シンガポール国立大学言語教育シンポジウム CLaSIC2018 報告
ー言語教育研究の最前線ー」
野元裕樹（東京外国語大学）
3. 「ベトナム語はどう教えられているのか、どう学ばれているのか
ーベトナム語教育と評価の現状ー」
田原洋樹（立命館アジア太平洋大学）

4. 総合討議 (司会: 富盛伸夫)

※共催: 東京外国語大学語学研究所

第 5 回研究会

日時: 2019 (令和元) 年 5 月 24 日 (金) 18:00~21:15

会場: 東京外国語大学語学研究所 (府中キャンパス研究講義棟 4 階 419 号室)

1. 発題: 「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮したコミュニケーション能力記述方法の開発と CEFR への応用に向けて」

富盛伸夫 (東京外国語大学名誉教授)

2. 「韓国語における『感謝と謝り』の言語特徴」

南 潤珍 (東京外国語大学)

3. 「ビルマ語における『依頼と断り』の言語特徴」

岡野賢二・トゥザライン (東京外国語大学)

4. 「カンボジア語における『定価のない商取引』の言語特徴」

上田広美 (東京外国語大学)

5. 「タイ語における『挨拶』の言語特徴」

スニサー・齋藤 ((東京外国語大学)

6. 総合討議 (司会: 富盛伸夫)

※共催: 東京外国語大学語学研究所

第 6 回研究会

日時: 2019 (令和元) 年 7 月 11 日 (木) 18:00~20:15

会場: 東京外国語大学語学研究所 (府中キャンパス研究講義棟 4 階 419 号室)

司会: 富盛伸夫 (東京外国語大学)

1. 「CEFR2018 年版 (Companion Volume) で提案された社会・文化的コミュニケーション能力の評価枠組みと、アジア諸語の言語コミュニケーションにおける『適切性』 (appropriateness) について」

富盛伸夫 (東京外国語大学名誉教授)

2. 総合討議 (司会: 富盛伸夫)

※共催: 東京外国語大学語学研究所

第 7 回研究会

日時: 2019 (令和元) 年 10 月 4 日 (金) 18:00~20:15

会場: 東京外国語大学語学研究所 (府中キャンパス研究講義棟 4 階 419 号室)

1. 「アジア諸語の呼称と人称詞 -ポライトネスの視点から-」

富盛伸夫 (科研代表者)

2. 「アジア諸語の社会・文化的特質と CEFR アジア版作成の試み

-タイ語、ビルマ語、カンボジア語、韓国語-

科研統括班 (スニサー・齋藤、岡野賢二、上田広美、南潤珍)

3. 「CEFR『準拠』への道程 -立命館アジア太平洋大学での CEFR 実装例-

田原洋樹 (立命館アジア太平洋大学)

4. 総合討議 (司会: 富盛伸夫)

※共催：東京外国語大学語学研究所

第8回研究会

日時：2019（令和元）年11月29日（金）18:00～20:30

会場：東京外国語大学語学研究所（府中キャンパス研究講義棟4階419号室）

1. 「はじめに：アジア諸語教育における社会・文化的項目とCEFRを活用した評価方法について」
富盛伸夫（東京外国語大学：科研代表者）
2. 「アジア諸語の社会・文化的特質とCEFRアジア版作成の試み(2)
ーマレーシア語、インドネシア語、ラオス語、日本語ー」
野元裕樹、降幡正志、鈴木玲子、藤森弘子（東京外国語大学）
3. 「アラビア語における社会・文化的特質 ー禁忌と回避の実例を中心にー」
スライマーン・アラールディーン SOLIMAN, Alaaeldin（東京外国語大学）
4. 総合討議（司会：富盛伸夫）

※共催：東京外国語大学語学研究所

第9回研究会

日時：2020（令和2）年11月13日（金）16:00～17:30

開催：Zoomによるオンライン研究会

司会進行：栞田 清（和洋女子大学教授）

1. 「CEFRの社会文化的コミュニケーション能力測定に関わる問題点と研究展望
ーアジア諸語領域での総合的研究成果のまとめー」
富盛伸夫（東京外国語大学：科研代表者）
2. 科研メンバーからのコメント
3. 総合討論（司会：栞田 清）

※共催：東京外国語大学語学研究所

3.3. 成果発表の出張など(主なもののみ)

藤森弘子：2018年8月1日～8月6日 ヴェネツィア / イタリア

「ヴェネツィア 2018年日本語教育国際研究大会（VENEZIA ICJLE 2018）」に参加し研究発表及び他の研究者との情報交換を行った。

野元裕樹：2018年12月5日～12月9日 シンガポール / シンガポール

「シンガポール国立大学のCLaSIC」に参加し研究発表及び他の研究者との情報交換を行った。

藤森弘子：2019年8月17日～8月20日 長春 / 中国

東北師範大学「中国赴日本国留学生予備学校40周年記念日本語教育交流シンポジウム」に参加し研究発表及び他の研究者との情報交換、日本語教員へのヒアリング調査を行った。

根岸雅史：2019年8月28日～8月30日 名古屋工業大学 / 愛知

「大学英語教育学会（JACET）第58回国際大会」に参加し研究発表及び他の研究者との情報交換を行った。

野元裕樹：2019年12月7日～12月11日 シンガポール / シンガポール

シンガポール国立大学言語教育主催「東南アジア言語教育・学習シンポジウム The Southeast Asian Language Teaching and Learning Symposium (SEALTLs)」に参加し研究発表（Using MALINDO Conc for

科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 2018 年度-2020 年度 研究課題/領域番号 18H00686 「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」の概要と活動実績 (2018-2020) (研究代表者 富盛伸夫)

Summary and Activities of the Research Project:

“Research and Development of CEFR Proficiency Description Methods with special consideration for linguistic types and socio-cultural diversity of Asian Languages : 2018 – 2020” (Nobuo Tomimori: Project Leader)

Malay/Indonesian language classes.) 及び他の研究者との情報交換を行った。

3.4. 運営会議・統括班会議

運営会議：2018 年 6 月 29 日 (第 1 回)、2019 年 5 月 24 日 (第 2 回)

統括班会議：第 1 回 (2018 年 6 月 29 日) ~ 第 16 回 (2020 年 1 月 27 日)、他にリモートやメールにより随時開催した。

4. 研究実績の総括(2018-2019)

4.1. 2018 年度

研究統括班が研究作業の円滑な遂行を把握・管理し、EU で進行している CEFR 改訂の動向を *CEFR2018* の解析を行うことで最新情報を把握しつつ、アジア諸語の特性に対応した能力評価項目の有効性を検証する準備作業を行った。

A 班：CEFR の東南アジア諸語への適用に際して必要となる言語類型論的、社会・文化的特質を考慮した新たな言語能力記述方法を提案する目的で、東アジア諸語を含む 4 言語のヒアリング調査により言語・社会・文化的付記事項付きの能力記述項目を抽出する作業を行った。

B 班：複層的な言語使用地域での言語学習に配慮した言語コミュニケーション能力の新たな評価法構築に向けてアジア言語圏の動的な言語使用を分析した。

国際研究連携事業として、Shobha Satyanath (インド・デリー大学准教授) 氏を招き、国際講演会 «Mapping English in India in Time and Space» を通してモデル構築に関わる議論を行った。

C 班：現代社会のニーズ、特に中等教育や生涯教育との接続も視野に入れ、日本における CEFR の受容様態の検証を行った。特に研究協力者山崎吉朗は日本の外国語教育政策における複数言語教育の問題点を整理した。

主な研究発信では、2018 年度は本科研の主催で年間 5 回の国際講演会・研究会を開催し、研究成果の交流に努めた。2018 年 12 月外国語教育学会第 22 回大会シンポジウム『CEFR と言語教育の現在』において研究代表者富盛伸夫が基調講演「CEFR と言語教育の現在、欧州諸語からアジア諸語への適用妥当性」を行い、本科研の研究課題に関する成果公開とともに貴重な意見交換を行うことができた。藤森弘子は 2018 年 8 月イタリアで開催された「ヴェネツィア 2018 年日本語教育国際研究大会」に参加し研究発表を行った。野元裕樹は 2018 年 12 月にシンガポール国立大学で開催された言語教育シンポジウム CLaSIC2018 でマレーシア語の学習動機に関わる発表を行った。

以上の研究経過と成果発表は、本科研の Web サイトの構築により 2019 年 3 月に発信している⁵。

4.2. 2019 年度

EU で進行している CEFR 改訂の最新動向 (*CEFR2018*) を踏まえ、アジア諸語の特性に対応した付記事項付きの CEFR 能力評価項目 (CEFR Descriptors with Asian Supplements) の原案を研究代表者と研究分担者 6 名からなる統括班のもとで具体化した。

研究の概要、課題研究の経過と中間報告書としてまとめられた成果発表は、東京外国語大学語学研究所の公式 Web サイトで協働科研のリンクにより 2020 年 3 月に発信している⁶。その概要と中間報告書に

⁵ 本科研の研究成果は研究拠点である東京外国語大学語学研究所の Web サイトに協働科研のリンク先として公開されている。(http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/Asia_CEFR/index.html)

⁶ 当初 2 年間の研究成果報告は「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開

発表された論文（査読付き）・総論（General Discussion）を班ごとに紹介する（掲載ページ番号は Web サイト上の PDF 版に従う）。

A 班：EU 主導の CEFR を再検証し、アジア諸語の言語・社会・文化的多様性を考慮した能力記述項目を開発することにより、実態にあった柔軟な評価方法を提案した。特に、2019 年度は社会・文化的人間関係が反映した待遇機能・談話構成を含むポライトネス理論を援用した社会言語適切性（Sociolinguistic Appropriateness）の記述方法の試案作成に向けて活動した。

- [論文] 社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法：
アジア諸語版－日本語版作成の試み 藤森 弘子 pp. 9-19
- [論文] 『外国人に対するベトナム語能力枠』を考える
－わたしたちは、教室の先にある「社会」を見ているのか－
田原 洋樹 pp.21-31
- [総論] 社会・文化的特質を考慮したコミュニケーション能力評価法をめぐって：
アジア諸語版の試み(2018-2019) －アジア諸語を対象にした CEFR 受容で
見えてきたものと捉えがたいもの－
富盛 伸夫 pp.73-111

B 班：2019 年度以降は CEFR 改訂版における複層的異文化間言語教育に関する動向を調査するため国際研究集会を開くなどにより、アジア諸語圏の複層的言語使用の中で言語学習者の複言語使用状況に配慮した方法論的研究を行った。A 班のメンバーと協働しつつ各言語地域の複層的言語コミュニケーションについて社会・文化的視点からの動態的分析を進め、言語学習者の複言語使用状況を考慮した言語能力測定方法の開発を試みた。特記すべきは、比較対象としてエジプトのアラビア語を背景にアラビア語文化圏の特質を研究したことと、CEFR2018 版で Mediation の一つとして取り上げられている手話コミュニケーションを対象に新たな研究対象を拡げたことである。

- [論文] Languages Education in Australia
- Policies, perspectives and diversity within the context of the Australian Curriculum -
Antonella Chiera-Macchia pp. 3-8
- [論文] アラビア語の社会・文化的特質 －挨拶と邪視を中心に－
スライマーン・アラールディーン ... pp.33-42

C 班：B 班の課題研究の視点を日本の複言語学習の再検証作業に応用し、中等教育・高等教育および社会的ニーズに対応した生涯教育における複数言語の能力到達度評価法の改善に向けて研究した。CEFR-J 研究者などと連携して日本の言語教育に適用しうる複言語学習における能力記述方法の提案、および大学入試の外国語科目の改定案を含め研究している。

発研究-中間報告書(2018-2019)-」のタイトルで東京外国語大学語学研究所の Web サイトに公開されている。
(http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/Asia_CEFR/index.html)

[論文]	CEFR-J に基づく英語テストのアジア言語への翻訳可能性 ーリーディング・テストとライティング・テストに焦点を当ててー	根岸 雅史	pp.43-53
[論文]	中等教育における英語以外の外国語教育の現状と展望 ー大学入試、文科省の政策、東京都の政策ー	山崎 吉朗	pp.55-71
[総論]	CEFR の日本社会における受容について	峰岸 真琴	pp.113-120

主な研究交流と成果発信では、上記第 3 章で記したように、2019 年度は本科研の主催で年間 6 回の国際講演会・国際ワークショップおよび研究会集会を開催し、研究成果の交流に努めた。

国際講演会としては、フィリピンから Shirley Dita (デラサール大学准教授) 氏を招き、インドの多言語社会の中での英語教育についての意見交換を行った。国際ワークショップとしては、マレーシアから Stefanie Pillai (マラヤ大学教授) 氏とオーストラリアから Antonella Macchia (南オーストラリア州教育省) 氏を招き、「言語教育 (CEFR) 国際ワークショップ」を開催した。

2019 年 12 月外国語教育学会第 23 回大会において研究代表者富盛伸夫とスニサー・齋藤の共同発表で「タイ語教育における社会文化的適切性と CEFR への適用 ーポライトネス理論の視点から見た人称詞・呼称表現を中心にー」を発表した。

国外での研究成果発表として、藤森弘子は 2019 年 8 月に東北師範大学 (中国・長春) で開催された「中国赴日本国留学生予備学校 40 周年記念日本語教育交流シンポジウム」で研究発表および日本語教員へのヒアリング調査を行った。また、野元裕樹は 2019 年 12 月にシンガポール国立大学で開催された「東南アジア言語教育・学習シンポジウム」でマレーシア語の学習動機に関わる発表を行った。

4.3. 2020 年度

2019 年度末から 2020 年度末 (2021 年 3 月まで) にかけては、新型コロナウイルス対策のため、国内、国外での研究会・講演会・研究出張・現地調査など場所の移動を伴う活動及び集会の開催に制限がかけられ、大幅な企画の変更に迫られた。研究拠点として利用させていただいている東京外国語大学への入構及び語学研究所への入室にも強い制限が課され、事実上、会議等での会合・研究会などには禁止措置がとられたため、2021 年 3 月現在に至るまで現場的な作業は不可能になっている。その中で、統括班メンバーや研究補佐の方々の献身的な尽力で、Zoom を用いたリモート会議・打ち合わせ、リモート研究会は一定の成果に繋げることができたのは幸いである。

この厳しい状況の中で、研究活動は各参加者の主力分野においてそれぞれの自主性を持って推進していただけたことは研究代表者としては参加者と研究補助者の方々に感謝申し上げたい。上記の事情から当初計画の中にあつた国際研究集会 (シンポジウム・講演会・研究会等) の開催は本年度については見送りとなった。この対応には研究総括班の中での緊密な意思疎通を行い、次善の策を企画してこられたことに感謝している。

2020 年度の本プロジェクトの成果発信としては、東京外国語大学語学研究所の公式 Web サイトが主なるものである⁷。科研期間における最終報告ともいえる本報告書、『「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」ー研究成果報告書 (2018 -2020) ー』やプロジェクトの概要やメンバーなどの情報が閲覧できる。

⁷東京外国語大学語学研究所の Web サイトに協働科研へのリンクとして公開されている。
(http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/Asia_CEFR/index.html)

以下に 2020 年度の各班の活動内容と、本報告書に発表された研究成果論文（査読付き）・研究ノート（査読なし）・総論（General Discussion）[査読なし]を紹介する。（ページ番号は Web サイト上の PDF 版に従う）

A 班:EU が 2018 年に発表した追補版の *CEFR CV2018* および、新たな 2020 年の改訂版 *CEFR2020* の内容を再検証するとともに、アジア諸語の言語・社会・文化的多様性を考慮した能力記述項目と評価方法と、CEFR 適用との関わりを含め各個言語の教材の開発研究を行った。

報告書に掲載されたものを挙げると、研究分担者根岸雅史氏の 2020 年の改訂版 *CEFR2020* の重点領域に位置付けられている言語教育における社会文化的側面の重視、特に異文化間の相互理解に関わる Descriptors を CEFR で確認しアジア諸語でその重要性を強調した研究、上田広美氏による商品売買の言語行動の研究、鈴木玲子氏によるラオス語教科書の比較作業に基づいた社会文化的項目の重要性の確認、スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン・齋藤氏のタイ語教育に応用しうる一人称表現・呼びかけ表現を素材にした人称詞・親族名称の発話機能研究、野元裕樹氏のマレー語教科書における人称代名詞と代名詞代用表現（親族語彙）の提示実態を調査した研究、南潤珍氏の新たな社会文化的コミュニケーション機能の分類を韓国語教育に適用して教材開発へと向かう包括的試み、ベトナム語をベトナム人留学生とともに学ぶ授業を行う田原洋樹氏の新型コロナ対策で行われるリモート授業の功罪の分析、特に教員と学生との人間的触れ合いが欠けることへの危惧と補完的实践を報告した研究は、本研究の基礎研究から現場での応用研究まで幅広い領域での貢献度が高いものであると評価できよう。

[研究ノート]	CEFR Companion Volume の複文化能力の適用	
	－「商品購入」場面の比較分析から－	根岸 雅史 pp.7-27
[研究ノート]	カンボジア語の買い物の会話例	上田 広美 pp.29-34
[論文]	ラオス語初級会話学習書の比較研究	
	－文化的社会的特質に着眼して－	鈴木 玲子 pp.35-47
[論文]	社会・文化的要素を踏まえたタイ語教授法に関する一考察	
	－一人称表現・呼びかけ表現を事例として－	スニサー ウィッタヤーパンヤーノン... pp.49-66
[研究ノート]	マレー語教科書における人称代名詞と代名詞代用表現	
		野元 裕樹 pp.67-75
[研究ノート]	韓国語の社会文化的特性に基づいたコミュニケーション機能別の	
	言語項目表の試みー日本語話者のための大学教材開発の予備的考察ー	
		南 潤珍 pp.77-88
[研究ノート]	ベトナム語オンライン授業の覚え書き	
		田原 洋樹, グエン・ホアン・ミン pp.89-98

B 班:アジア諸語圏の複言語・複文化社会で CEFR を適用することの可能性と限界を考えるとともに、言語学習者が行う複言語使用の状況を考慮に入れつつ、A 班と協働し各言語地域の複層的言語コミュニケーションの特質について言語能力測定方法の研究に従事した。

本報告書には、上記 3.1.1 および 4.2 で紹介した 2019 年 9 月に開催した国際シンポジウム

Summary and Activities of the Research Project:

“Research and Development of CEFR Proficiency Description Methods with special consideration for linguistic types and socio-cultural diversity of Asian Languages : 2018 – 2020” (Nobuo Tomimori: Project Leader)

での招待講演「マレーシアにおける英語教育への CEFR 導入をめぐる議論について」«Putting the CEFR into Malaysian English Language Education: The Debates Surrounding Its Implementation» (マラヤ大学教授 Prof. Dr. Stefanie Pillai) の内容が論文として掲載され、マレー語他の多言語社会での英語教育への CEFR の導入様態を論じている。研究分担者矢頭典枝氏はアジア各地で広く認められる英語変種の研究と IT 教材への応用研究を代表者として行っているが⁸、その研究とリンクして、社会・文化的特質からみた各英語変種の多様性を論じた。研究協力者内藤理佳氏はアジアにおける複層的言語文化研究の一環として、社会学的視点を加えて 16 世紀以来の旧ポルトガル植民地のひとつであるマカオにおけるポルトガル語系少数者言語のフィールド調査を実施し現地の話者との交流を通じて活発な保存継承運動について貴重な最新情報を報告した。

[論文]	Putting CEFR into Malaysian English Language Education	Stefanie Pillai	pp.1-5
[研究ノート]	KANDA×TUFS 英語モジュール「アジア英語版」にみる社会的・文化的特質： インド、フィリピン、マレーシア版を中心に	矢頭 典枝.....	pp.99-113
[研究ノート]	マカオのポルトガル語系話者 (マカエンセ) の エスニシティに関する調査報告	内藤 理佳.....	pp.115-120

C 班 : A 班および B 班の研究成果を日本の言語教育、特に複言語学習の再検証作業に還元し、中等教育・高等教育および社会的ニーズに対応した生涯教育における複数言語の能力到達度評価法の改善に向けて研究した。CEFR-J 研究者などと連携して日本の言語教育に適用しうる複言語学習推進への政策的提言、および変化目まぐるしい大学入試の外国語科目改訂の問題にもアプローチしている。

研究分担者藤森弘子氏は、日本語教育の世界的拡大で生ずる海外学習者のニーズの多様化と教育政策上の対応や教材開発などの諸問題についても考察を加えた。研究協力者山崎吉朗氏は昨年の中間報告書に掲載した日本の中等教育における英語以外の外国語教育の現状分析に続き、中等教育と大学教育との高大接続に複言語教育の継承と強化がグローバル化する世界で日本社会の将来に最重要課題のひとつであることを強調している。

[研究ノート]	海外の日本語学習者の動向からみえてくること —2018 年度海外の日本語教育機関調査結果をもとに—	藤森 弘子.....	pp.121-132
[研究ノート]	高大接続と複言語教育 —大学入学共通テスト、文科省の複言語推進事業、 英語以外の外国語検定試験—	山崎 吉朗.....	pp.133-152

研究統括班 : EU で進行している CEFR 研究の最新動向を把握し、複層的社会・文化的コミュニケーション研究および異文化間言語教育に関する研究情報を分析しつつ、本科学研究による成果の有効性を検証する作業を行った。統括班委員による統括班会議開催により、意思疎通

⁸ 科学研究費助成事業基盤研究(B)「多様な英語への対応力を育成するウェブ教材を活用した教育手法の研究」(研究代表者: 矢頭典枝神田外語大学教授、研究課題/領域番号 JP18H00695)

と研究遂行の潤滑な運営に配慮した。

統括班メンバーによる、総括的な総論 (General Discussion) が常時より交わされてきたが、本報告書では、拝田清氏は 20 年間に展開されてきた日本への CEFR 受容に内在する深刻な問題点の指摘がなされ、「富盛科研」と表現された本科学研究の約 20 年間の軌跡を辿りつつ日本の言語教育における位置付けを分析し整理してくれているが、代表者としては感謝している。峰岸氏は現代日本の言語教育の偏狭な効率主義を批判し、多言語文化化への意識が希薄な社会政策として実施された場合の言語能力の評価自体がもつ危うさを指摘する。CEFR の捉え方や受容の望ましい様式を考える上で唆に富む発言であろう。研究代表者富盛伸夫は、拝田氏の総括の上に立って、本科研の根底にある問題意識を、欧米の人文科学、特に 20 世紀言語学が変転を繰り返したプロセスの中で基本命題として通底する言語思想上の試みとして提示した、さらに、あえて欧米とアジアという両端を設定した座標軸を援用しつつ、EU という歴史地理的・文化的に比較的均質な土壌に育てられた CEFR の非 EU 世界との接触と受容・拒絶の狭間にある言語教育思想 (イデオロギー) を整理し研究展望を示そうとした。

[総論]	日本における CEFR 受容を問い直す —CEFR 受容への批判と富盛科研の取り組みを対置しつつ—	拝田 清.....	pp.153-170
[総論]	言語・文化・社会から見た CEFR 評価 —現代日本の社会課題問題解決に向けて—	峰岸 真琴.....	pp.171-189
[総論]	CEFR 思想の根底にあるものを考える —積極的受容と無関心との間で—	富盛 伸夫	pp.191-228

4.4. 総合的自己評価と総括

総括して、3年の研究期間のうち当初2年間は、研究成果を国内外の関係学会・研究集会および Web 上で公開したことで問題の喚起を図るなど、当初の目的と計画に従って研究活動は全体として順調に進展したといえる。2020年1月から深刻化した感染症の拡大に伴い、研究拠点としての東京外国語大学語学研究所へのアクセスは事実上不可能となり、研究参加者間の連携は現場的には滞りがちであったこと、研究会はもちろん、国際集会、講演会などの開催は様態の変更を余儀なくされたことは認めざるを得ない。このような想定外の状況において、7名からなる研究総括班は常にメール等で緊密な意思疎通を行い、可能な限り最善の対応がなされてきたことには統括班リーダーかつ研究代表者として研究の良き同僚に恵まれたとありがたく思う次第である。

異例の事態が長期間に渡って続いたにもかかわらず、研究参加者各自の専門領域と分担分野での精進の成果として、本報告書の作成と発信に至ったことは、関係者各位の理解と努力の賜物であったと代表者として感謝の意を表したい。科研期間は終了するが、承継される、そして承継されるべき多くの問題の深化と広がりとを認識する現在、本科研で提起された一つ一つの設問に答え、また、研究者に課された現代社会の期待に応えてゆかねばならないと考える。

科学研究費助成事業 基盤研究 (B) 2018 年度-2020 年度 研究課題/領域番号 18H00686 「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」の概要と活動実績 (2018-2020) (研究代表者 富盛伸夫)

Summary and Activities of the Research Project:

“Research and Development of CEFR Proficiency Description Methods with special consideration for linguistic types and socio-cultural diversity of Asian Languages : 2018 – 2020” (Nobuo Tomimori: Project Leader)

謝辞

本研究は東京外国語大学学内共同利用施設「語学研究所」を主たる研究上の拠点として利用させていただいた。研究代表者及び分担者・研究協力者の多くが所員として活動する親しい空間で長い間の共同研究が許されたことは、所長・所員をはじめ大学関係者の多くの方々のおかげである。特に、研究の遂行に必要な機器などの設備、研究会やセミナー等を開催するための研究空間として与えられ、研究コスト節減とともに研究環境の利点が与えられてきたことにも感謝したい。

また、上記研究所では Web サイト⁹を通して言語学・言語教育学の研究成果を社会に向け常時閲覧可能としているが、本科研の成果も同 Web サイトにおいて公開させていただいていることにもこの機会に謝意を表したい。

末筆ながら、このたび本報告書を研究成果刊行物として発信できたのは、日常的な研究活動の支援に加えて編集作業に携わってくださった同研究所補佐の深尾啓子さんと東京大学大学院の YI Yeong-il さんにひとかたならぬご尽力を賜ったからに他ならない。ここに深く感謝して記します。

⁹ 東京外国語大学語学研究所のサイト (<http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilr/index.html>) を参照。

本科研プロジェクトの参加者一覧(担当分野は本科研に関係するもののみを記す)

富盛 伸夫 (研究代表者)	東京外国語大学・名誉教授	研究統括及び CEFR 適用妥当性研究
上田 広美 (研究分担者)	東京外国語大学大学院総合国際学 研究院・准教授	カンボジア語教育およびカンボジア語能 力評価法
岡野 賢二 (研究分担者)	東京外国語大学大学院総合国際学 研究院・准教授	ビルマ語教育およびビルマ語能力評価法
鈴木 玲子 (研究分担者)	東京外国語大学大学院総合国際学 研究院・教授	ラオス語教育およびラオス語能力評価法
スニサー ウィタヤーパンヤーン 齋藤 (研究分担者)	東京外国語大学世界言語社会教育 センター・特任教授	タイ語教育およびタイ語能力評価法
田原 洋樹 (研究分担者)	立命館アジア太平洋大学アジア太 平洋学部・教授	ベトナム語教育およびベトナム語能力評 価法
南 潤珍 (研究分担者)	東京外国語大学大学院総合国際学 研究院・准教授	朝鮮語教育および朝鮮語能力評価法
根岸 雅史 (研究分担者)	東京外国語大学大学院総合国際学 研究院・教授	英語教育および英語能力評価法
野元 裕樹 (研究分担者)	東京外国語大学大学院総合国際学 研究院・准教授	マレーシア語教育およびマレーシア語能 力評価法
拝田 清 (研究分担者)	和洋女子大学国際学部・教授	アジア・オセアニア地域の言語研究およ び CEFR 適用妥当性研究
藤森 弘子 (研究分担者)	帝京大学外国語学部・教授	日本語教育および日本語能力評価法
降幡 正志 (研究分担者)	東京外国語大学大学院総合国際学 研究院・准教授	インドネシア語教育およびインドネシア 語能力評価法
峰岸 真琴 (研究分担者)	東京外国語大学アジア・アフリカ 言語文化研究所・教授	アジア諸語類型論および CEFR 適用妥当 性研究
矢頭 典枝 (研究分担者)	神田外語大学外国語学部・教授	英語変種研究および CEFR 適用妥当性研 究
萩原 寛 (研究協力者)	長崎県立大学・名誉教授	多言語社会研究、フィリピン諸語研究
アラーエルディーン ・スライマーン (研究協力者)	東京外国語大学世界言語社会教育 センター・特任教授(-2020.3)	アラビア語教育、比較社会・文化論
内藤 理佳 (研究協力者)	上智大学他・ポルトガル語非常 勤講師	マカオの複言語社会研究
山崎 吉朗 (研究協力者)	一般社団法人日本外国語教育推進 機構 (JACTFL)・理事長	中等教育および高大接続の多言語教育政 策